

昭和

尾崎一雄

丹羽文雄

石川達三

伊藤整

文学全集

小学館

昭和文学全集



11

尾崎一雄

丹羽文雄

石川達三

伊藤整

昭和文学全集

第11巻

昭和六三年三月一日 初版第一刷発行

著者——尾崎一雄 丹羽文雄 石川達三 伊藤整

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一東京都千代田区一ツ橋 丁目二番一号

振替 東京八一〇〇番

電話 編集・〇三二九二四二五一

業務・〇三二一三〇五三三

販売・〇三二一三〇五七二九

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568011-3
© MATSUE OZAKI FUMIO NIWA
YOSHIKO ISHIKAWA SADAKO ITO 1988

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

尾崎一雄 5

7 暢気眼鏡

1 6 落梅

2 5 虫のいろいろ

3 2 瘦せた雄雞

4 5 霖雨

8 1 すみっこ

1 2 7 まぼろしの記

1 6 0 夢蝶

1 7 6 楠ノ木の箱

1 9 1 松風

2 0 0 閑な老人

2 0 7 鎌倉の人

2 1 2 蜂と老人

2 2 0 迅く来いクリスマス

2 2 9 木刀・井戸・玉樟―老人の冒険―

2 3 7 日の沈む場所

2 4 5 ハレー彗星

2 5 2 四角な机 丸い机

2 5 4 早くも一年

2 5 6 天折した友の本

2 6 2 苺酒

丹羽文雄 265

267 鮎

275 贅肉

292 海戦

357 厭がらせの年齢

377 青麦

459 熊狩り

468 中華料理店

474 父子相伝

480 旅の前

493 帰郷

501 妻

509 わが母の生涯

石川達三 521

523 蒼氓

557 日蔭の村

639 生きている兵隊

699 神坂四郎の犯罪

748 流れゆく日々 昭和45年11月1日〜11月30日

764 死を前にしての日記より

伊藤整 781

783 馬喰の果

798 街と村より 序・第一部 幽鬼の街

834 灯をめぐる虫

851	生きる怖れ
867	若い詩人の肖像 第五章、第七章
950	散文芸術の性格
963	近代日本人の発想の諸形式
989	組織と人間
994	近代日本における「愛」の虚偽
1001	求道者と認識者
1007	雪明りの路
1041	作家アルバム
1049	解説 尾崎一雄……佐伯彰一

1056	丹羽文雄……河野多恵子
1063	石川達三……巖谷大四
1070	伊藤整……曾根博義
	年譜
1077	尾崎一雄……紅野敏郎
1082	丹羽文雄……清水邦行
1088	石川達三……久保田正文
1094	伊藤整……曾根博義
1100	底本について
1101	用字用語について

尾崎
一雄

暢気眼鏡

一

「ちよつとオ」とか「これよ、これ」とか云う芳枝の声を、「うるさいな」と思い思い、私ははつきりせぬ夢から抜け切れずにいた。私は直ぐ覺めた。朝だ。芳枝が、薄眼で呆然（ぼんやり）としている私の鼻先に何か光るものを突きつけて、

「これ」

「何だ」見ると金色の妙な恰好（かつこう）したものが、私には何か判断がつかなかった。

「これ、一寸（いちゆん）壊れてるし、あると歯が痛いから除（と）ちやつた」

入歯の金冠だなどと思うと、私は全く眼が覺めむっくり起き上ろうとしたが、止めた。ちらと芳枝の顔を見やり、夜具を鼻の辺まで引

き上げ、又眼を閉じて了った。私には一寸何も云えなかった。「態（さま）を見ろ」と何かに云われていると感じ、「判（は）つたよ」と反撥（はんぱつ）的に頭の中であたりを見廻すのだった。するといろいろの顔が浮ぶ。「死ね」と泣き乍ら云った母。「元の兄さんに返つて下さい」と手紙を寄越した妹——すでに四年も見ない顔だ。一月程前、雜司（ぞうし）ヶ谷（や）にいる芳枝の姉に、自分達のことを事後承諾（じごていさく）させに行つた時、「承知（しやうち）不承知（ふしやうち）なぞとわたくしにはもう——。ただ、あれは一人の妹ですから、先々人並の生活だけはさせてやって頂きとう存じます」と云われた、その姉の教師らしくないやさし気な眼付き——「もういい、もういい」と苦笑いするのを追いかけて「俺も居るぜ」と顔を出したのは友人のSだ。一週間程前、金借りに行つたが度々のことで断（つ）われ、私がふくれ面（む）し

ているとSが改まった顔付になり、「君はどうしても僕とこから持つて行くつもりかね」とゆつくり云つた。私は全然居直つた形でSを見返すと、「為方（かた）がないんだ」とふてぶてしい声を出した。Sは、蒼（あ）い顔で暫く黙っていたが、「じゃあ、為方（かた）がない」と云うなり立ち上ると押入をガタンと開け、行李（こしり）の中から和本二三冊取り出して私の前に置いた。「足りまいが、これをどうにでもして貰（もら）おう」

手にすると、国芳（くによし）あたりの春画本だ。私はそれを膝の前に置き、暫く考え込んだ。やがて割に平氣な顔で「有難う」と云つた。が云つて了うと、不意に激しい感情に襲（う）われた。図太（ず）い張りが消し飛んで了つたのだ。

「僕は、どんなに恥を擡（た）いても、今、為方（かた）がないんだ。絶対に今金が無くてはいけないのだ。出来れば泥棒（どろぼう）でもする。君に云つたところが判（は）りつこはない、君がそっくり今の僕になつて見ない以上は。だから、腹でどんなに罵倒（ののし）されていようと僕は関（かま）やしない。その覺悟（かくご）は初めからしているんだが——」云っていると、眼前のSを忘れ、自分だけの感情から意気地（いぎぢ）ない涙（なみだ）を浮（う）べて了つた。Sが其の時どう云う顔したかは覺えぬ。後で碁（碁）を打ち、双方（ふたう）氣持（きぢ）を取り戻して別れたのだが……。

芳枝が、

「これエ、要らないんだけど——どうする？」

「どうするつたって——」と向き直つたが、此の場合怒つた風をする外ないと思われ、

「なぜ君はそんな莫迦なことをするんだ。その齒、そんなにして、当分治せるあてはないじゃないか」怖い顔をして見せた。芳枝は氣押された様子だったが、まだ私の氣持をうかがう風は捨てず、独言のよう、

「これ自分で売りに行つて、ドラ焼買おう」と云つた。私は返事をせず、尚もみじめな自分の氣持を小突き廻していた。昨日の夕刊に、或時計店の広告ビラが折り込まれていて、金大暴騰、一匁に付純金いくら十八金いくら、今が売り時、とあつた、それを見ての思ひ付きに違いない。自分の喜ぶことを予定している様子なのが氣にくわなかつた。或はそれは一つ屈折して、自分の氣持を軽く運ばせようとした芳枝の心遣いかも知れぬ。それなら更に不愉快だと思つた。二十やそこらの子供にいたわられては堪らぬ。やはり持前の単純暢氣さから、金無くてむつとして自分を喜ばせる氣でやつた事だろう。この方なら氣に喰わぬ乍らも、此の場合負わされる所まだ多少軽くて済む。——然し可哀そうな奴だ、と主我的な氣持に余裕が出て来た。そう思うと、氣持はずつと芳枝の方に流れ、私

はまた違つた意味で弱り切つた。顔付を柔らげて、

「無い方がいゝんなら除つちまってもいいけど、あとどうかな。だけでもう片方のやつはこわれてないんだから、また俺の寝てる間に除つたりしちゃ駄目だぜ、今度は本当に怒るよ、いいか」

「うん」と急に嬉しそうな芳枝の顔を残し、も少し寝ると夜具を頭からかぶつた。

午近く行きつけの質屋へ出かけ、金冠を見せると十八金七分と云うことで、四円いくらになつた。溜つてゐる利息に呉れと云うのを持ち帰つて第一に米を買つた。嘗て聞いた、貧乏し切つて何も彼もなくなり、金齒を入質して米を買つたが、それを喰う段になり弱つたという笑話が苦々しく憶ひ出された。

二

芳枝と知り合う前のことを簡単に書く。

三年程一緒にいた妻Eと、私に収入のないことから不和になり、加えて郷里の母との間の鬱積した關係が極度に達した時、何も彼もが面倒になつて私は不意にN市へ走つた。N市には私の尊敬する芸術家が居るのだ。N市へ行つてその人の顔を見、声を聞いたなら切れ。そんな呼吸も落ち着こう、ただそれだけの望

みしかなかった。Eは行く先を知つて居たが、郷里では知らず、のち使の者がEの所へ来て判つた。母はあきらめ、一つには行き先が先故多少私の氣持も考えたらしく、後追うのを止めた。云い忘れたが、私は父が早死した家の長男で、老いた母と三人の弟妹を世話しなければならぬ身の上なのだ。家計のやり方に就て母から不服を云われ、言われて見て自分も悪い点を認めたが、母がそののみ責めたことから私はつむじを曲げた。そして現実にかの經濟は破局に近付き、それを捨て置いてのN行だつた。

N市に居着いて、氣持では郷里のことから可なり離れることが出来た。行く処まで行つたからだ。が、妻に關してはまだ処理し切れなかつた。N行に際し、私はKと云う友人に「あとを万事お願いする」と云い置いたのである。それを云う時、卑怯かな、と多少思つた。が、止むを得ないのだと思えた。Kは私にもEにも古い友だが、一時互の居所の距りから行き来間遠の頃があつた。その間に私とEとの間はひどい不和になつていた。Eが以前やっていた商売をまた始めると云い出し、私も賛成して市内の旧居に帰つてからは、Kもよく来て世話を焼いて呉れたが、第一に私とEとの不和に驚き心配して呉れた。粗暴な私は、すでにその頃口で云うことを止

め、Eをよく殴った。或時はEの左鼓膜の破れたのに気づかず、翌朝鏡に向つて、かわいた血に驚いたことがあった。KはEに同情した。それが段々と育つて行き、Eもそれを感じ始めたのと知つてから、私は余りEを殴らなくなつた。そして、私とEとの間は冷え切つて了つたのだ。

N行の支度のこととEと気まずい口をきき合つた時、私は顔は真面目に、冗談らしい調子で、

「俺が行つて了えば勝手にしていられるんじゃないか、まアふくれるな。俺は鉾きさをおさめるぜ」と声だけで笑つた。

「何おつしやるの」Eは云つたが、私は云う顔付を見ようともしなかつた。Kにはああ云つたし、これで片づこう、そう思つた。

N市の、現実には妻の顔見ぬ生活では、Eに對して巻き切つたと見えた私の氣持にも、予想通り多少のゆるみが来た。Eを哀れな女と思えた。が、二三ヶ月して私の動揺も静まつた。八ヶ月目に帰京し、直ぐ妻との間を決算した。EはKの妻になり、郊外に家を持つた。

三

一人になつて一年後、昨年さくねんの夏、K市から

始めて東京に出て来た芳枝と知り合い、一ヶ月のつき合ひの後、事実上の結婚をした。

私に母や弟妹を捨てさせ、妻を去らしめたのは直接には金の問題だが、根本は私が小説を好くことにある。私としては普通の世渡りの成り難い程元來偉くも莫迦ばかでもない密かに思つてゐるのだが、いつか小説好くことの深みに陥り、父の遺産が無くなつて氣附いた時は遅かつたのだ。世を渡る術うづの足場は全て失ひ、余裕あるころその方向への心構えは捨てて顧みなかつた故、あらゆる意味の空手で、追われても走る氣力のない野良犬、先ずそんなものだ。一人になつた時、それでいいと思つた。もとよりなかなか氣に入つたものが書けるとは思はず、書いてもそれで世間並にやつて行く望のないことは前からの覚悟故、自分一人で困つていれば済むと氣楽だつた。再び結婚はすまい、腐れ縁の古女房が居るのだと小説のことを考え、事実N行以來書けそうに思えて来たのであつた。

芳枝に好意を持ち、芳枝の肚はらも判つた時、私は当然躊躇ちゅうちよした。然し、それを飛び越えて了つた。芳枝のすなおに示す感情の美しさに挫くじかれたのだ。が、一方、また此の女を苛めるのかと自分を咎めぬわけにゆかなかつた。その氣持は、芳枝が若く、何も知らぬ暢気な娘と思えた故、強く来た。

四

居る所は汚い下宿の六畳で、机、本棚、空簞だ笥がしを並べ、コンロを廊下の隅に置いて自炊生活だ。宿主は、為事しごとが片付けば纏めて払うからとの私の言を信じ切れぬらしく、食事持つて来ることを断わつたのだ。宿には相当額の宿料が溜つていた。自分は今、何もせずにゐるのではないから少しは余裕を見せ、落ち着いて為事をさせて呉れぬものかと、多少腹が立つた。いくらでもと入金をせめて立て、食事を止めて其日の米を得るためにあちこちと駆け廻らせるのでは、結局為事は遅れて互の損ではないか、そう云つてみても、「うちも困つていますから」と相手にしない。いらだちと奔走とで、事実なかなか為事は捗はかどらなかつた。その為事は或全集物の一部で、遅れる程損であることはよく判つていたのだ。

五

ひどい生活の中で芳枝が割に暢気であることは、現在助かると思ひながら私としては一方絶えず追立てられる氣持だつた。この暢氣さが何時まで続くか、ゴム糸が延び切つたらそれでおしまいだ。そうならぬうちに、

平気な顔の奥で焦り続けている私のそばで、暢気な芳枝は暢気なお饒舌りばかりする。殊に好んで幼時の話をする。今の惨めさに追われて意識せぬながら憶いが暢気だった昔に返るのかも思われ、私は気が沈むのだった。云うことは全でたわいなく、多くの場合相槌ばかりで私は何も聞いてはいないのだが……。

——五つの時、赤い着物を着ていた為、七面鳥に追いかけられた、それ以来その着物を七面鳥のおべと云った。花を取ろうとして河へ陥ち、通りかかった郵便配達夫に助けられた、その時の着物が河のおべ。新井白石は三つの時、屏風に天下一と上手に書いた、と幾度も母親から聞かされ、張り立ての襖に大きくそう書いて母親を呆れさせた、六つ。

——その翌年父親に死なれた。

「……今生きていると七十。あたしの覚えていた恰好だつて、おじいさんだった。暮を打って、赤い毛氈の上で字を書いて、夜はお酒を呑んで、うすいお膝をしていつも坐っていた。おかしいことがあるの」——上、下と、二つの便所があるのに、父親は庭の隅に置かれた桶に小用を足す。四つ位の芳枝が必ずついて行ってそれを覗こうとする。父親は叱って、やがて帰って行く。いつもいつも桶に浮ぶ泡が不思議だ。

「——ええそれ、お父さん肥料にすんのよ。」

庭の隅にほんのちよっぴり茄子と胡瓜を自分で植えては育てていたの。もう情けなアいのが、数えるほどしか生らないの。そのこやし、自分のおしっこでないといけないんだって、他人のは汚いんだって——「厭なお父さんと芳枝は笑いこけるのだが、私には只何かしゃべっては笑う芳枝が可笑しかった。私は芳枝のおしゃべりを素通りさせ、勝手に自分だけの思考を追う。次のようなことを憶い返している。——

六

二ヶ月程前、急な宿料の催促に居たたまれず、この宿を逃げ出したことがあった。金策に出て来ると立ち上る私をつかまえて離さず、一人此処に居るのは厭と泣き出した。連れて出かけたが、今日いくらでもと云うのもとより出来るあては無く、夜になった。宿の方向へはすねた馬力馬のように動かぬ芳枝を連れて、或友人の下宿へ行った。

私だけが上ると、三階の汚い四畳半で、若い貧乏な友人が、「やア」と起き上った。今夜泊めて貰いたいと私は云った。

「いいとも。芳枝さんは？」

「玄関にいます。あいつも頼む」

「ああ。いよいよ夜逃げか」

「そんな形だが、荷物は一つも持ち出してない。そのつもりでなかったんでね」

「明日行って、知らん顔で一寸したものの持ってくるんだね。——兎に角下へ行って蒲団借りて来よう」

「じゃア、序でに芳枝に上れて云って呉れ」

「ああ」と降りて行ったが、暫くして戻って来ると、妙な顔で、芳枝がいらない云った。

どうしたことか見当がつかず黙っていると、

「捜して来ようか」と友人が多少せき込んで云った。あいつ大分興奮していたがと思い、私は一寸不安になった。が同時に何となく腹が立って来た。

「そうだね——今にやって来るだろう、他に行く所はなし……」考えていたが、やがて三階の窓際に立つと私は十二時に近い真黒な外に向って、

「芳兵衛、早く来ないか。来ないと、もう知らないぞ」と怒鳴り、思い切りの大声で「莫迦」と云った。然し、返事はなかった。前の原を隔てた或大学の野球部合宿の建物が闇の中から「莫迦」と木魂を返して来た。私はひどく腹が立ち、自分の顔の蒼くなるのが判った。友人が、

「——然し、他に行くところがないんだから尚……」云いかけるのを、

「いいんだ。癖になる、いよいよ来なければそれでおしまいさ。兎に角寝ようか」

「寝ようか」友人は芳枝の床もつくつて呉れた。それを見ると今更に困ったと思った。

三十分程して、階段を上って来る音を聞き、私には芳枝と判った。大膽の足音が障子の外で止り、「今晩はア」間のびした声だ。「どうぞ」答え乍ら、友人が起き上った。腹の底に湧き起った安堵の氣持を押しつぶして、

「どこをウロついていたんだ、莫迦」私が云うと、「ううん。ここ開けてエ」と足で障子をガタガタやっている。友人が開けると、「今晩はア。ああ重かった」両手にかかえた風呂敷包みを、ドサリと置いた。

「何だそれは」

「着物に寝衣に枕掛けに毛布に、それから——と包みを開けにかかった。

「呆れたね」私は丁度こちらを向いた友人の顔を見た。友人は変に目を光らせ、「うむ」とうなるような声を上げた。そして、

「君どうだこれは」と私を見た。私は或感に迫られたが、笑って、

「こいつは只暢氣なんだよ。——まあ、いや、持って来たものなら、丁度間に合う——」

「持って来ちゃいけなかったの？ だってこんなもの、清水さんとこないでしょう、余分」

「ああ、持って来てよかったよ。重かったらう」

「重いののは平氣だったけど、もう夜中でしょう、随分怖かったわ、ここへ来る道」

「じゃア君、寝よう。今日は疲れた」私は真先に横になった。芳枝は持って来たものを、これ清水さん、これあなた、これあたしと分け、直ぐ寝支度にかかった。やがて横になったが、暫くするといびきを立て始めた。

私は黙って天井を見ていたが、疲れながら一寸眠れそうでなかった。やはり上を向いて眼は閉じている清水も同じらしいと思っていると、彼が上向いたまま、

「君は、暢氣だ暢氣だと云うが——」と云った。

「そりゃ、それだけで片付けては居ないよ。然し暢氣で簡単坊主なことは事実さ。只それだけに僕としては尚のこと——何と云うかなア」

「若いんだし……。何とかして君の為事を早く仕上げたいもんだよ。刻下の急務はそれだ」

「そうなんだ。それがねえ、今の僕は——碁や将棋で後手後手と廻っていじめられる、あ

れだ。何とかして先手さえ取れば——」

「うん」

暫くして清水も寝入った。

二三日経って、清水の隣室が空いた。夜具附きで借りることにし、私達はそこへ移った。

窓の下の広場は三つに仕切られ、野球部の合宿に面した側は全くの空地で学生や子供達の小さな球場になり、某美術学校に面した側は、テニスコートとベビーゴルフ場だった。或時、清水の部屋から二人の学生の球投げを眺めていたことがあったが、学生は清水の知人らしく、我々を見付けると、グローヴを高く上げて見せた。

「やろうと云うんだが、どうだ。道具はある」清水が腰を浮かすので、出かけることにした。芳枝もついて来た。

私はそう云うものを手にするのは十年のかた無いこと故、強く投げると肩を痛くすると思い、ミットを持つ事にした。然し、この遊びで屢々怪我した経験ある私は、受ける方でも臆病で手が延びず、落球やパスボールばかりするのだ。すると見ていた芳枝が、

「下手下手。見られん」と国言葉で云った。

「生意氣云うな。やって見れば楽しや無いんだ」

出来ると云う故、冗談にミットを渡すと、右へはめかけたのを左へなおし、皆の方を向いて構えた。皆笑って相手にしなかったが、試しに清水が投げたのを正確に取った。球はスポンジでなく、本ボールと云われる固いものだった。私もグローブをはめ、二三べん投げて見た。

「冗談じゃないね。君よりうまいぜ」清水が真顔で云った。私もそう思っていたところなので、

「おかしな奴だな、オイ、これやったことがあるのか」訊くと野球はしたことないが、学校でバスケット・ボールの選手だったと云う。多少安心して、少しづつ強い球を送って見たが平気故、今度は強いぞと力をこめて投げるとそれも取った。殆んど落球しなかった。

私は不図^{ふと}気付いた。芳枝は妊娠しているのだ。失敗^{しぱい}ったと思ひ直ぐ止めさせ、部屋へ帰って休めと云いつけたが、不服らしい顔付きだ。皆に知れぬよう腹へ手をやりその恰好^{かうこう}をして見せると、頭を手で押え、直ぐ帰って行った。

やがて私達も宿に帰った。清水の無駄口を聞き流していた私が、「縮^{ちぢ}尻^{しつ}だったよ。こいつが暢^{ちやう}氣^きすぎたんだ」云うと、その調子から清水も、

「何だ」と真顔になった。私の意地の悪い眼付きを浴び、芳枝が妙な顔していた。

「子供が出来てるんだ」

「そうか、それは——」芽度^{めど}いとも弱ったろうとも云えず、一寸間^{ちよつと}を置いて「悪いことをしたな」

「今丁度大事にしないといけない時期らしい。こないだこいつが何かを読んで、自分で云つてたばかりなんだ。俺もうつかりしていたが、第一本人が注意しなけりゃいけない。もうお転婆は止すんだぜ、いいか」

「うん」と情けない顔だ。

夜、芳枝は常の通り直ぐ寝付いたが私はなかなか眠れず、隣室の清水の、何か頁を繰る音を聞いていたが、やがて其処へ出かけて行った。

清水はバットに火をつけ大きく吸って吐き出すと、「ふふふふ」と笑い、「今日はなかなか演じたね」と云った。

「演じた。然しどうもおかしな奴だよ」云うと私も可笑しくなり、一寸笑いが止まらなかつた。「盲者蛇に怖^{おそ}じずてのはあれだね」と球投げの事を云い、何事もあれだとまた思つた。少し書きにくいを書く、妊娠についてもそれが云えるのだ。今子供が出来る事は何よりも困る故、芳枝にもその事を云い、条件が整うまでとして、或方法によることを承知

させた。それが、腹からの承知でなかったのだ。或時芳枝が密^{ひそ}かに用具を不完全なものにして置いたのを私は気付かなかつた。後で不審に思い、或はと問い詰めると、どうしても欲しくて、と泣き乍ら詫^わび入るのだった。私は考え込んで了つた。やがて「判つたからもういいよ。泣かないでいい。これからはあんなことはなしにするからね。その代り、立派な赤ん坊を生むんだよ、いいか」と、私にしては柔^なしい調子で云つた。芳枝は泣きじゃくりながら強く大きく合点合点をした。私はその肩を抱いてやつた、——一寸人に云える事ではなく、清水にも話す気はなかったが、

「子供なんかつくるって法はないんだ、我々が」とだけ云つた。

「そりゃ^{そり}や^や為^{ため}方^{かた}がないやね」

「それより先ずあいつとしたら、僕みたいな男と一緒にするのが向う見ずだよ」

「その間のいきさつは兎も角として」清水が笑い笑ひ「はたから見たらそうも云えるだろう。ところで我々にとつちや向う見ずや物好きがいて呉れないと困るかも知れないぜ。一生世話のして呉れ手がなかつた日にはね。尤^もも是は別問題だが」

「そうさ、別問題だよ」話に喰い違ひを感じ、私はあまり口をきかなかつた。暫くして部屋に帰り、寝た。

二三日した午後、往来で知人に逢った。久美浜と云う新聞記者をしている男の細君で、好きからマネキン倶楽部を経営し、一日中忙しそうに飛び歩いている女だった。

「よ才」と、それが持ち前の男のような口をきいた。

「よ才」

「よ才じゃないよ。わしゃ随分搜した。一体全体あんな方、今どこにもぐってんのさ。」

——一寸そこいらで休もう、往来じゃア話が出来ない」

附近の茶寮に入り、久美浜シナエから芳枝をマネキンに頼みたいむねの申し込みを受け、マネキンなどと云う美貌が元手の為事、芳枝にその資格あるとは思えず、向うが乗り気なだけ私は氣遅れがした。

「僕としちゃア、金は欲しいから異論はないけど——あれで出来るのかねえ」

「なに、そう云ったもんでもないよ。あたしが一寸ぬったりなでたりすりゃ、あれで結構使える」

「どうだかねえ」

いろいろ云っていたが、結局本人次第と云うことになった。私はそのまま用達先へ出かけ、留守にシナエから芳枝に話して貰うことにした。

三時間程して夜になり、私が帰って見ると

芳枝がぼんやり部屋の真中に坐っていた。

「シナさん来たらう」

「うん」

「引受けたか」

「断ったけど、頼む頼むって云われるし、それにお金欲しいもん」

「出来ればやって呉れよ。身体の方一寸心配だけど——シナさん氣がついてたかい、ここ」と腹を指して見せた。

「ううん。あたしの、割に小さいから、誰も氣がついてないわ。なまけなまけやれば、楽な為事だつて」

「そうか。それじゃあひとつ、なまけなまけやって呉れ。なに、これも経験だ」

「やるわ。だけど、恥かしいな、きつと」

「なアに、でくの棒や石ころが大勢居ると思つてりゃいいんだ」

すると芳枝は、「シナさんもそう云った」と笑いこけていたが、

「これだけ置いてったわ」と金を出して見せた。衣類一通りは芳枝の物で間に合うのとことで、金は質受けの為前金として置いて行つたのだ。日本橋のS屋に明日から向う一週間、K正宗の宣伝と云うことだった。

翌朝、髪結い、化粧、質受け、と済んだが、帯を締める段になり、弱った。手鏡一つしかない上に、介添が私故一向埒はあかない

のだ。後の恰好、芳枝がどうひねりまわしても私の目にさえ変で困ったが、投げ出しは来ず、いい加減なのを「それで結構、中々よく出来た」と叩いて見せた。暫く後手に撫で廻していた芳枝が、今日は止めると泣き出した。泣かれては化粧が台無し故いろいろなだめ、下宿の主婦の忙しい中を頼み締め直して貰ったが、十時までにと云うのが九時半を過ぎて了った。車を拾うため道ばたに立っていると、人がジロジロ見てゆく。朝から盛装で厚化粧故無理ないとは思ったが、何か言葉を投げた者あった時、私はそいつをにらんでやった。こう云う姿で見る芳枝は私に始めてで、どこかよその堂々たる背高女と居るように思えるのだつた。車が呉服橋にかかり、向うにS屋が見えると私はもう一度いろいろと注意を与えた。日本橋の交叉点で下りた。

「落ち着いてやるんだよ。いいか芳兵衛。相手は石ころにでくの棒だぞ」私は真剣に云つた。声が大きかつたらしく、あたりの人が見たが、氣にならなかつた。芳枝は高島田を重そうにうなずかせ、一寸笑つたと思うと急に私が今まで見たことのない取り澄ました顔付になり、電車路を横切つて行くのだった。丈高く肉のしまつた身体のゆつたりした歩きかたを私は凝つと見据えていた。其時の私は、芳枝をあわれと思う心に珍らしく浸つて居

た。私は少しも——自分自身にさえ取りつくるう気もなく、しおれた風で早稲田行の市電停留所の方へ歩き出した。

七日間を無事に務め、少し許りの金を持ってこの宿に帰った……。

七

——机に背を凭たせ、ばやけた薄眼の底に、尻を落す坐り方した芳枝の恰好を写していた。今から生れる児を自分勝手に女と決め、いい女名前と赤い着物のことしか考えはせぬ。何しろおかしな奴だ——。

「ねむたいの？」と芳枝が云った。

「いや」私は机から背を離れた。

「何だ、そっちの方が眠そうじゃないか」

「でもないの。だってあたしの話、聞いてないんだもの。話さしといてずるいや」

「聞いているさ。聞きながら一寸考えていたんだ」

「どんなこと？」

「めくら、蛇に怖じず、と云うのだ」

「いやねエ。あたし蛇大嫌い」

ところがお前はそれでもなさそうだぜ、と腹で微笑した。眼が開いたら——芳枝のかけた強度の「暢気眼鏡」もいづれ壊れずには居ない、其の時を如何に收拾すべきか——。

「あああ、つまんないの」芳枝が両手を後についた。

「しゃべり草臥れたんだろう」

「それもあ、実は少しねむくもある」と坐り直し、両手で眼をこすっていたが、何と思つたか両方の上まぶたをくるツと引繰り返し、その顔を突き出した。

「これ出来るウ？」

「いやだな、何の真似だ。元通りにしちまえよ早く」

「随分下手になったわ」云いながら瞬きするとそれが直つた。眼が涙っぽくなっている。

「あたしね、学校の体格検査の時、いつウも自分で眼をむいてつたの。順々に並んで行くのよ、あたしの番が来て校医さんが、しようとしてひよいと両手を上げると、これでしよう、やアこれはって云うのよ、いつウも。」

——だけどやらないでいると駄目、綺麗にいかないわ。やつぱり練習ね」

「そう云うものかねえ」私は無然としてそんな返事をした。

『追記』

「暢気眼鏡」と云う題で短篇書くことを思いつき、直ぐ取りかかったが、半分程で筆が進まなくなった。暫く放って置き、またかか

て見ると、其時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。——女主人公の暢気さが次第に影をひそめ出したのだ。それは日常生活で必然的に「私」と云う男に影響した。「何故一気に書いて了わなかつたろう」私は悔いたが、今更どうもならなかった。出来るだけ最初の頃の空気を作り、その中で兎にも角にも書きかけのものを仕上げる事に努力した。上掲のものがそれだが、結果はやはり不満だった。

「この暢気さが何時まで続くか」そう危ぶんでいた状態が、知らず識らずそれに眼を覆っていた私に、ごまかしのきかぬ程迫って居た。芳枝はもう沈鬱な女になっていた。口には何も云わなかつたが、ふと見ると眉の辺りにいやな線を刻んでいることがあった。

或静かな夜、突然こんな風に云い出した事がある。

「ねえ」

「なんだい」

「人間てね」

「なんだ、早く云え早く」せっかちな私はそう云う話し方が大嫌いだった。

「人間てね、死んで了えば何も彼もなくなるのね」と早口に云った。

「そうさ、それがどうした」